Pearl S. Buck の匿名作品のころ（作品論）

佐 藤 重 夫

〈目　次〉

I　John Sedges というペンネームの作品
II　Pavilion of Women
III　Kinfolk
IV　Command the Morning

I　John Sedges というペンネームの作品

Pearl Buck が真剣に取り組んだアメリカ題材の小説はどれも，批評家たちから好評が得られるということがほとんどなかった。[1] アメリカものを書く彼女の小説は，成功しないというのが，世間一般の常識とさえなっていた。アメリカ人や土地になじんでくるにつれて，彼女はアメリカの題材を大いに活用したいという意識が，高まってきたのだが，一方では，彼女自身として，中国をテーマとする作家だというレッテルを貼られている以上，アメリカ主題の作品を書いても公正な論評は期待できないと思っていた。そこで思いついたのが，あるペンネームを使うということだった。「私は John Sedges という単純な男性の名前を選びました。それは他の職業と同じように，文学の世界でも男性は女性よりハンディが遙かに少ないからです[2]」。だが，彼女の作品を出版して，決して損することはないと踏んでいた各関係出版社が驚くほどの速さで，次々と彼女が本を書き続けていったという点から推量すると，男性ペンネームを使ったのは，営利的な面の配慮も加わっていたものとも思われる。

さて，John Sedges のペンネームで出版した小説は，合計 5 本である。すなわち，The Townsman (1945), The Angry Wife (1947), The Long Love (1949), Bright Procession (1952), Voice in the House (1953)である。1958 年に，以上の作品のうち，3 本の作品から成る選集が発行されているが，その序文の中で，「もう私は男性のペンネームをやめて，これからアメリカものでも，中国ものでも自由に書きたいと思っている。誰でも知っていることだし，知るべきことですが，アメリカにいようと，アジアにいようと，人間は，所詮，人間なのです。私にとって小説の舞台というのは人間のたわむれの背景に過ぎないのです[3]」と所信を述べている。

John　Sedges のペンネームで書いた 5 本の作品の中で，特に重要な代表作は The Townsman であろう。この作品の背景と登場人物が，従来の，彼女のアメリカ主題の作品とは全く異なり，内部情報でも摑んでいなければ，これが Pearl Buck の作品と推量できる人は，恐らくいないであろう。[4] この物語は，まず 19 世

紀から20世紀初頭にかけての開拓期のカンザス州Medianという町の周辺から始まっている．

この作品の最も優れた特徴と言えば，アメリカ西部における初期の開拓地の実態を正しく描写している点である．冒頭に出てくる，ひどい泥沼に浸った開拓初期の町の光景は，特に印象的な描写である．草土で作られた家屋，大草原の火事，ブリザード，伝道集会，板道の始まり，町での最初の植樹，それに厳しい苦難の開拓生活が，感受性の鋭いMary Goodliffeに与えた影響など――このような情景が説得力のあるリアリズムで巧みにとらえられている．

この小説は綿密な調査をもとに書かれている．背景をとらえ，この地方の歴史や住民を熟知するため，Pearl Buck自身がカンザスへ取材旅行に出掛けている．彼女の二度目の夫Richard Walshが，たまたまカンザス生れでもあり，この小説の背景情報を彼女に提供している．したがって，題材の信憑性は，カンザスの住民の確認済みと言えるわけである．(5)

背景描写や基本的な出来事のリアリズムに加え，The Townsmanの台詞にも十分な信憑性が示されている．方言形式，新鮮な表現，風変りでおもしろい語句の選択，文の構造などに，かなり留意している．文体について言えば，方言的要素と生き生きとした表現が，作品に楽しい自然色を添えているという以外は，別に目立つものはない．非対話部分の書き方には，中国題材の初期の小説に見られる半聖書的文体が採り入れられてはいない。どちらかと言えば，Other Gods（1940）(6)の中で用いられている文体に最も近い，平凡な散文体である．

The Townsmanのリアリスティックな特徴が，作品全体に魅力を与えている一方，中心人物となるJonathan Goodliffeを通じて明確な訴えも行っている．Jonathanという男は，「遊ぶことより，働くことを念頭におく」(7)思慮分別のある，誠実な人物である．彼がイギリスを出発するまでは，学校教師になるための勉強を続けてきたので，辺境のカンザスに着くとすぐ，教師の職に就く．そこでは，教師であるばかりか，欠席児童の親代りにもならなくてはならない．幼い生徒には手や顔を洗ってあげる課外業務も果さなければならない．そんなとき，彼はその生徒に魔法をかける振りをしたり，Vergil（70-19 B. C.; ローマの詩人）の叙事詩Aeneidの最初の部分を朗唱したりしながら，言うことをきかせ，上級

生たちには町外れの居酒屋で酒を飲ませたりしないように，自分の義務を果していく。

それに，Jonathan はこの町の設計者としても貢献する。彼は，Median の町が荒涼とした，無法の牧畜の町でなく，落着きのある郡役所所在地となることを望んでいる。また，移住者たちの家族からは，「子供たちには校舎が必要だ．子供のいる母親はそれを強く望んでいる．そうすれば，家の男たちも賢くなってくれる[8]」と言われ，立派な学校建設の訴えがあることも重々承知している。Jonathan はどの宗教にも属していないが，地域社会に教会が必要であることを強調し，その目標に向って努力する．彼はこの町の開発規準を定めようと努力するばかりでなく，私生活も厳しく自己管理し，体面も重んずる．これまで最愛の女と思っていた，唯一の女性に捨てられ，愛もない Katie Merridy と結婚する．この結婚生活は満足するものではなかったが，Jonathan は，勘こそ鈍いが，よく働く妻と共に暮そうと決心する．同じ立場にある別の男なら，恐らく離婚してしまうだろう，と思いながらも，「自分はこの Median の町で築き上げてきたものすべてに愛情を持ち過ぎている[9]」ことも，彼はよく理解している．老年になると，Jonathan は，Median の町に向ける愛情が，自分を捨てた愛人への生涯の愛情に代えられるまでの満足感を味わうようになる．「彼の人生の創造物」である Median の町が，計画通り，「繁栄する農村の中心地」となっていく[10]。

カンザス州 Median は，結局，Gopher 大草原へと変貌の徴候を示すことになるが，これによって，Jonathan の業績が損なわれるわけではない．公共心のある個々の人たちの努力がありさえすれば，安定した地域社会が築かれるということだ．Jonathan Goodliffe のような人々が，開拓期の西部に影響を与えたことは否定できないが，その生活については，普通，郡保安官，警察署長，牛泥棒，インディアンなどのように，より華やかな側面に焦点があてられる文学の中では見落されがちなのである．The American Historical Novel という論考の中で，Ernest Leisy は，「The Townsman は，アメリカの歴史小説家が開拓生活での，よりセンセーショナルな面を強調せずに，特殊社会を築く上で有益な，分別ある善良な市民に重点を置こうとして試みた転換期の作品である」と述べている[11]。Pearl Buck はアメリカ西部初期のカウボーイ物語に飽き，開拓という，より建

設的な側面を描写しようとしたのである．

主人公の Jonathan Goodliffe はよく描かれている．彼の真意や感情がよく理解できる．生活，思想，Median での生活に与えた影響などは，偽りのない真実感がある．ただ残念なことは，単調で，はっきりしない人物に描かれているため，Dickens 風の効果をあげることができない点である．虚構の中で描かれる，多くの「善人」のように，結局は退屈な男に収まっている．時折，人の気を引くような一面もあるが，このような突然のほどばしりは，散発的なもので，印象づけるほどのものではない．

The Townsman は，アメリカの一開拓者家族の歴史，草原の町としての発展史の価値がある．しかしながら，物語に現実に起りそうもない架空があったり，いろいろなタイプの人物が現われたり，明らかにプロパガンダと思われるものがあったりして，その迫力が弱められている．いたずら者で落着きのない Jonathan の弟 Jamie は，アメリカ南部出身の高貴な美人と結婚し，大きな石油会社の重役になる．したがって，Jamie は，Jonathan の最愛の女性であった Judy Spender と駈け落ちした Evan Bayne 弁護士の義兄弟となる．Jamie の立身出世や Bayne 家の人々とのつながりが，余り偶然に符合しているので，容認し難い面もある．上品でハンサムな貴族 Evan と，わがままで無知な Judy は，特に興味をもたせるだけのもので，多くの小説の中でよく繰り返される，お決まりの登場人物の典型と言える．

南北戦争後，カンザス州に移住してきた，真面目で愛想のよい黒人の Parry 一家は，「自由な」国で生活していながら，人種的偏見の犠牲者として登場している．Stephen Parry の，賢い義理の息子 Beaumont は，Jonathan の援助と，いささかこじつけの筋立てにより，フランスで有能な外科医となる．ここで忘れてはならないことは，フランスで彼は，黒人ということで差別されていないということだ．アメリカの人種的偏見についての冗長な話が災いして，筋立てが論理的発展を乱し，ただ教訓のみを引き出そうとするため，登場人物の何人かを二次的役割へと押し込めている．教訓的な配慮が，かえってこの作品の，ある部分の迫力を弱めているのである．

この小説の表現には，活力に欠けているところがあり，特に中間部分に目立っ

ている。語調も全体を通じて控え目である。それは，主情主義という見当違いの要素が紛れ込まぬように，開拓途上のアメリカや，高潔な市民に対する「賛歌」を故意にぼかしているようにみえる。もちろん，感傷主義は感じられる。それも大部分抑えられてはいるが，決してないわけではない。時折，この物語に襲ってくる，この要因が，散発的に現われる教訓主義と共に，なくて済まされるなら，この作品には柔軟さが出てくるであろう。もし，The Good Earth の中に，こうした特徴が取り入れられてあったとしたら，傑作の品位も台無しになっていたであろう。

Pearl Buck が実物通りに書くとき，その描写は効果的である。例えば，Goodliffe 一家が泥だらけになって Median に着いた様子，草土におおわれた素朴な家に住む家族の描写，教養ある母親が矛盾する環境に立ち向かう場面といったエピソードには，開拓者生活の極めてリアルな感情を十分とらえて描いている。しかし，Pearl Buck は舞台を非現実化する，緩和剤的なロマンチシズムによって作品の背景効果を希釈してしまうことがある。スマートな Evan Bayne の登場，煮え切らない Judy Spender, Beaumont の立身出世といった，さまざまな要素が，蓋然性を失わせている。リアリズムと相容れないロマンチシズムが，結局，この小説の印象を損ね，二流どこの作品にしてしまっている。

しかしながら，The Townsman が概して読者層の評判がよいのは，確かにリアルな面とロマンチックな面とが混在しているからでもある。この作品が，文学史の点からも，Pearl Buck 作品の研究者たちからも関心事とされているのは，開拓者部落の建設の模様や，公共心に富む一開拓者が部落のために献身的に努力する様子などを巧みに描く表現力にあると言える。アメリカの小説にはこのような主題にふさわしい余地が，確かに存在し，Pearl Buck は部分的にそうした話題を説得力をもって取り入れている。これとは別に，The Townsman という作品は，長所，短所を含め，その特徴のいくつかが，主題や背景こそ違え，John Sedges 名による後半の小説にもよく示されていることから，Pearl Buck の文学活動の研究に興味深いものがある。

John Sedges 作品は，どれもすべてよく書かれているが，中でも The Townsman の数ヵ所の部分と，The Long Love という作品に登場する脇役 Lew Har-

rowの生き生きした描写が，特に目立っている．Pearl Buckはさまざまなアメリカの題材で興味深く，教訓的な作品を書いているが，John Sedges作品では，比較的性格描写の深みが出ていない．教訓を極度に強調したり，万事がうまくいくだろうという，得々とした一般感情が現われたりして，作品が，よく感傷主義に陥り，構想の背後に潜在する力量に値しない，いわゆるビクトリア朝時代の特徴を備えている．

更に，John Sedges作品の特徴は，ヒーローとしての善人の登場である．すなわち，堅実な市民，忠実な夫，親切で誠実な人——このような人物が，明らかにPearl Buckの関心をひくタイプなのである．Jonathan Goodliffeのほかに，The Angry Wifeに登場するTom DelaneyとPierce Delaney, The Long LoveのEdward Haslatt, Voices in the HouseのWilliam Asher, それに, Bright ProcessionのStephen Worthなどがそうである．中でも，Jonathan Goodliffeが最もうなずける人物である．理由は，その時代背景，場所，意図，活動が，極めて論理的に描かれているように思えるからだ．HaslattとAsherは，堅苦しい，古風な，しかも，よそよそしい面が見られるが，それぞれの木目細かいストーリーの文脈の中で信頼できる人物に描かれている．しかし，Delaney家の人々やWorthの場合は，深みのない人物像で，明らかに小細工をした，厚さも幅もないように描かれている．

II Pavilion of Women

Pearl BuckはJohn Sedgesのペンネームによる小説を書く一方，並行して実名でも執筆している．この時期で最も好評だった労作の中に，Pavilion of Womenという小説がある．貴族階級で有力な中国家庭出身の既婚婦人，Wu夫人が，この小説の中心人物である．間接的には，この家族の二世代について叙述されたものだが，常にWu夫人がその中心に置かれている．彼女の夫は家長ではあるが，Wu夫人がすべて所帯を切り盛りし，Wu一族所有の広大な農業利権を管理している．賢くて知性的なWu夫人は，夫に対し心から愛情を抱いているわけではないが，自分の義務はすべて忠実に遂行し，家族との関係は強い絆で

結ぶという，模範的な妻となっている。40歳の誕生日を迎えたとき，もうこれ以上子供をつくりたくないと発言して，夫や家族を仰天させる。裕福で，伝統のある中国の家庭では，女性が40歳を迎えたその日は，しばしば決断の日であり，新生活の始まりの日でもある。例えば，Wu夫人の義母も40歳になったとき，家事一切の管理権を一人息子の妻に委譲している。Wu夫人は40歳以後に子供を生むことを恐れ，これ以上夫との性的関係を望んではいない。夫にまだ性的関心が衰えないことを知ったWu夫人は，夫に内妻を持たせようと決意する。夫には親切で素直，そして，教育のない田舎娘を慎重に選び，その娘に当然なすべき責務を教える。夫は妻の提案に，初めは拒否するが，その決意が堅いと知ると，同意してしまう。

Wu夫人は，神経質で気むずかしやの自分の性質に向かない肉体的懸念から解放されると，自由に自分の精神を陶冶しようと心掛ける。他人の問題に関わることなく，自分の個性や個人的な興味を心ゆくまで伸ばそうとする。

間もなくして，彼女は息子の一人に家庭教師を雇う。自称Brother Andréという，この家庭教師は，異端者のかどで聖職を剝奪された信徒で，この町に住み，孤児院を管理している。Wu夫人の息子FengmoがAndréの指導を受けるようになると，息子もWu夫人も彼の高潔な思想の影響を受けることになる。彼女もAndréのもとで勉学しようと決心する。Andréは，Wu夫人が生き甲斐を失った，不幸な女性であることを知る。彼は彼女に知的で，精神的な新知識を与えようとする。Wu夫人は，彼の宗教について詳しく尋ね，彼の生活が全く人道主義を基本としていることを知る。Andréはできるだけ仲間を援助したり，他人に親切な，慈悲深い生活を送ろうと努力する。

Brother Andréとその生活態度を敬うWu夫人の気持は，日に日に増していくが，勉強を進めるうちに，家庭が崩れ始める。息子たちと嫁たちとのあいだにはいさかいが起り，Wu氏は内妻のChiumingと不仲となって，ある花屋の娘に目を向けるようになる。Brother Andréの指導で，Wu夫人は自分の不幸や，家庭の破綻，不満をじっくりと考える。夫や家族の一部のものと関係を断った彼女は，不必要な責務から解放され，他の誰からも何の要求を受けず，自分の問題は自分で処理していきたいと主張する。彼女が夫を不当に扱ったり，内妻を

自由に売買したりする所有物としか考えておらず，すべて他の女性に対しては優越感を持つことなどを，Andréは強く指摘する．Wu夫人に対して，利己主義に走らぬよう，説得する．そのとき，彼女は，心から愛せる相手が一人もいなかったことに気づく．これまで自分を喜ばせてくれるものがいなかったし，自分も常に他人の欠点や弱点が目に付きやすくて仕方がない．愛情問題を考える場合，彼女はAndréの教えや，「隣人を汝の如く愛せ」という言葉を思い浮べる．彼女は，「愛」という言葉が本当に「強烈すぎる」ものだと主張したことがあったが，そのときAndréは，「愛という言葉はあまりにも強烈です……あなたのおっしゃる通りです……愛とは言葉ではありません．いや，むしろ，『隣人を汝のように知れ』ということです．つまり，隣人の苦しみや立場を理解してあげ，その欠陥を自分の身になって親切に扱ってあげるということです．自分を評価できないときに隣人を評価しては駄目です……これが『愛』という言葉の真意なのです[(12)]」

Brother Andréが死んで，――ある店の主人を助けようとして，偶然，強盗に殺害されてしまう――Wu夫人は彼に恋していたことに気づくのだったが，それ以後，AndréはWu夫人の心の拠り所となる．絶えず彼の忠告を思い出し，それを実行に移そうとする．そして，家族にまつわるさまざまな問題も円満に解決するあらゆる努力をする．Wu氏の愛する，あの花屋の娘に来て貰い，第三婦人として家族に迎え入れようとする．また，息子たちと嫁たちとの確執もできるだけ円満に解決したり，Andréが助けた，寄る辺ない子供たちを引き取って面倒をみたりもする．他人に対する思い遣りが出てくると，利己主義が遠のいていき，今までより一層生活に満足するようになっていく．そこで，Wu夫人は愛を自分の生活の基本に置き，もはや普通の人々を嫌悪する態度をとらなくなる．

自叙伝的作品の中で，Pearl Buckは，この小説を高く評価した世界中の女性たちから，沢山のファンレターを貰ったことに，特に触れているが，確かに人の心に訴える要素の多い作品と言える[(13)]．まず第一に，文体が詩的で，みずみずしく，生き生きとしている．調子は故意にロマンチックになっているが，East Wind : West Wind（1930：中央学院大学創立二十周年記念論集『現代経済・社会の歴史と論理』――Pearl S. Buckの世界観――参照）の前半部分をしのばせるところ

がある。文体は華麗で魅力的な上に，作品の主題にぴったり調和している。昔の，裕福な，しかも，心地よい中国人家庭の設定が，文体とうまくかみ合い，つやと魅力を増している。第二に，Pearl Buck は，農民集団に関する知識ばかりでなく，裕福な中国人家庭の風習や活動についての知識も豊富であることを明示している点である。背景描写なども克明で説得力があり，時と場所がいかにもリアルに見えてくる。第三は，Pavilion of Women は，新鮮なエピソードを作り出し，決して衰えを見せない面白さ，多様性，かなりの叙述的魅力を立証してくれる空想的状況の中に，登場人物をうまく配備する Pearl Buck の並みはずれた鋭い才能を最も発揮した作品の一つであるという点である。

主題の重要性，つまり，個人的意義，永遠性という問題と，卓越した文体の点から，Pavilion of Women は重要かつ印象的な小説と言うべきであろうが，事実はそうではない。では，その欠陥となる点は何かと言えば，Pearl Buck の教訓的な意図を維持しようとする，つまり，他人に対する無私無欲の愛情と献身という価値を立証しようとするあまり，物語の内容がかなり過度に小細工されるところにある。Wu 夫人が André の処世哲学を自分の信条として採り入れると，彼女の親切さや協調性があまりに突然，作品に拡散し，締りがなくなる。一見不可解な問題も容易に解決されるか，簡単に処理されてしまう。人は無私無欲で愛他心をもって行動すれば，堅い結び目も必ずほぐすこともでき，ゆるめることもできるということを，Pearl Buck もはっきりと暗示している。これが真実でありたいと思う気持は誰にもあるが，しかし，それは断じて事実ではありえない，あるいは，少なくとも Pearl Buck が考えているような単純なものではないことぐらいは誰にも経験的にわかるものである。過度の簡素化や，同情を誘う感傷主義が始まっているのである。感傷主義というのは，The Good Earth や The Mother のような作品の中で用いるのを潔しとしなかった Pearl Buck が，不幸にも 1939 年以後の創作にますます多く，その中心に置くようになった。

この小説のもう一つの顕著な弱点は，主要人物の二人——Wu 夫人と Brother André——のいずれも信じられない存在の人物であるということである。Wu 夫人の変身には説得力がない。一般にはその変化が理解できないであろうと思わ

れる．もちろん，変化の結果を理解できるが，ただ，変化自体について述べられているに過ぎない．恐らく叙述形式としてはまず失敗ではないだろうか．多くのことが縷々述べられているが，読んでいて十分に納得できない面が多い．Wu夫人の理性と思考過程に対する内面的な分析が，より深く，より漸進的なものであれば，Pearl Buckの人物描写が一層納得でき，信じられるものとなっていたであろう．Wu夫人はあまり突然に，しかも，非現実的に慈悲深い婦人になりすまし，そして自分や家族が直面する数々の問題を処理しようとするその技量は全く奇想天外である．

人は誰もBrother Andréのような人物の存在を信じたいと思う．確かに，この人物は聖者であり，Pearl Buck自身の人道主義に基づく創作上の代表例である．説教をし，それに，それ以上に重要なことは，親切で無私無欲，そして，善行的な生活を送ろうとするAndréは，誰もが見習ってほしいと望むPearl Buckの理想的人物の典型として存在している．しかし，このような理想像に血を通わせようとする古い技巧上の問題が，Andréの描写に繰り返されている．確かに，善人の生活より悪人の生活を描くことの方が，作家にとっては遙かに容易である．例えば，古典の例として，Miltonの「失楽園」の中で，SatanはAdamより立派である．Brother Andréは，架空で，しかも願望充足した人物として，現実の生活におけるよりもJames Hiltonの Shangri-La（イギリスの小説家James HiltonがCambridge在学中に書いた処女作Lost Horizon（1933）の舞台となった不老不死の秘境の名称）の幻想的世界に，より相応しく，奇妙で魅惑的な人間として登場している．この点が，残念なことにAndréをよく理解する上で，かなりの想像力を必要としている．確かに，Andréには，読者の関心を引きつける特有な力がある．Andréという人物の展開に，一層の配慮と，性格描写に一層の分析が加えられていれば，印象的な現実の人物として描かれたものになっていたかも知れない．

最後に，興味深い点が一つある．Wu夫人は，宗教上の諸問題に関して懐疑的だが，しかし，Andréの説く永遠性については納得するようになる点である．つまり，Andréは存在し続け，Wu夫人の心の中に生き長らえるということである．愛情によって彼女に精神的超絶性をもたらしたということだ．形式的な宗

教上のドグマや，その他の精神的関心事に，彼女は決して影響を受けることはなかったが，今や André に対する愛情が神秘さをきわめている。自分が死んだあと，自分の魂は生き続け，愛情が自分を説得してくれるものだと，Wu 夫人は信ずるのである。

創作上のこの設定と，A Bridge for Passing の作品の中で述べているような Pearl Buck の個人的見解との類似性は印象的だ。このノンフィクション作品は，主として夫である Richard Walsh の死に対する Pearl Buck の反応を取り扱っているものだが，霊魂不滅に対する信念を述べているのである。(14) この問題について，Pearl Buck は滅多に自作品の中で取り扱うことはなかったが，彼女の思考が，霊魂不滅という信念に影響を受けていることは明らかである。愛情こそが，この作品の結論となっている。

III　Kinfolk

A House Divided のごく一部と，Other Gods の作品を除いて，Pearl Buck は，普通アメリカ的題材と中国的題材を分けて作品を書いている。しかし，作家生活としての，比較的後半で，叙述的に価値があり，東西両洋の世界が一冊の本の中に合流するという，主題的に興味のあるいくつかの小説も書いている。これまでは主として一つの地域だけを主題として描写してきたが，東西二つの国の類似点と相違点を解明しようとする意図が Kinfolk という作品に最もよく表現されている。この小説は Liang 一家を物語にしている。Dr. Liang は中国で育ち，ニューヨークの，ある大学の中国哲学の著名な教師となっている。長男の James は，アメリカの医学校を卒業して，中国で就職したい旨を父に知らせると，父は立腹する。James は中国の人々を救済したいという希望を持っている。結局，極東に向けて出発し，北京の病院に就職する。その後，Dr. Liang の末娘の Louise はアメリカの青年とかかわり合うようになり，父は彼女と別の二人の子供を中国へ行かせる。James と，それに彼と同じ理想主義者の妹 Mary は，Liang 家の先祖代々からの村落である Anming に住みつく決意をする。

Anming という所は，ぬかるみの多い，不潔な，しかも，信じられないほどの

未開な町だが，若い二人は，共にこの村落の伝承との関わりを強く望み，草の根運動による中国の村民たちへの援助の手を差しのべたいと願っている．大おじにあたる Tao の援助で，James は小さな診療所を開業し，一方，Mary は読み書きの指導にあたる計画をする．Dr. Liang の別の二人の子供たちは，父の先祖の国，中国の再生運動に参加することを期待している．

Kinfolk は中国農民と在米中国知識人との相違点を強調する意味では優れた作品である．Dr. Liang は，アメリカ学生への儒教精神の伝承者だと信じている．彼にとっては，学者と知識人だけが重要な存在なのである．普通の中国人をあざけ笑い，徹底した紳士きどりの俗物で，農民が中国の人口の大半を占めていることを認めようとせず，女性の纏足の風習が 20 世紀に行われていたことなども否定する．Dr. Liang は，確かに Kiang Kang-Hu[15]や，The Good Earth の信憑性を非難した批評家のような中国知識人をモデルにしているのは間違いない．Dr. Liang の息子 Peter は中国へ行き，中国の実情を知ると，父の持論に幻滅を感じ，学生革命に参加する．結局，Peter は政府警察によって殺されるが，Peter の死を反省する Dr. Liang は，「中国とはどんな所かを感情的な概念で子供たちを故意に育ててきた」ことに気づく．「彼はそうした概念を植え付けようとさえした．……しかし，子供たちにはどうしても中国の栄光，名誉，祖先や祖国の威厳などを理解させたかった．彼自身もこれらのことが頭から離れなかった」[16]

この小説では，アメリカの Dr. Liang の生活水準は，中国の上流階級に相当していることを示している．何世紀もの間，地主や行政官ばかりでなく，学者も一般大衆の上位にいて抑圧してきた．専制と紳士きどりというこの結合が，残酷な非人道行為に対する反動となって現われ，その結果，共産主義が生れてきたのである．

Dr. Liang の末娘 Louise は，James や Mary とは全く違っていた．中国を嫌い，態度や好みが全くアメリカ人的である．典型的な若い中国系アメリカ人の感覚を代表している．中国系アメリカ人でも，年配者の多くは中国に戻ることを考えているが，ニューヨーク市に住む若い中国系アメリカ人の大部分は，生れ故郷アメリカに満足し，そこから離れたがるものはいない．ニューヨークの中華街のさまざまな状況や，マンハッタンに住む比較的裕福な中国人社会を見ても，

中国に対する反応がいろいろ分かれていたり，あるいは，相反していたりする．

この小説の中で，中国とアメリカとのいくつかの類似点や相違点が強調されている．例えば，中国の小村に住み，生粋の中国人と結婚した Mary Liang は，支配力のある，有力な教師，指導者で，アメリカ人らしく振る舞い，この土地の中国女性たちに自立心を持たせようとする．一方，アメリカ人と結婚してニューヨークに住む Louise の方は，夫に絶対服従し，母親が，現在の世の中は非常に乱れきっていると言えば，それが正しいと思う古風な中国人的妻となっている．貧富の区分をアメリカや中国にあてはめてみるということも，確かに強調されるべき，もう一つの命題である．しかし区分されるところには，必ずそのつなぎとなるものがあるものだ．例えば，Dr. Liang の妻は，Tao 叔父のいる Anming の 18 世紀的な古めかしさと，James や Mary の現代性とのつなぎの役を果している．Dr. Liang 夫人には双方の見解を理解してあげられる人間性と心遣いがある．まさに「新しいもの，古いものがそれぞれ異なる基準に基づいて共存しなければならぬ世界」[17]の天秤のようなものである．

Dr. Liang が多くの中国人との関係を断とうとしているとき，息子の James は村医としての生活に入る．そして彼は，「どこにも夢のような美しい故国なんてあり得なかった．……あったのはただ，貧困と抑圧，そして，それに対する無関心さだけである」[18]ことを知る．だが，彼と Mary は極めて実務的，精力的で，時代に遅れた状況をなんとか改善しようと努力する．James は農家の娘と結婚する．人々が治療を怖がるときなどは，中国人妻 Yumei を通じ，患者たちとのギャップを埋めた．知識人と農民が一体となったときにはじめて，中国の教育，経済，医療が改善されるのだということを，この小説は暗示している．しかし，Pearl Buck の信念としているのは，知識人は農民こそわが身の存在の根源だということを認識させることである．Dr. Liang に人生の意義を納得させてくれるのが，何も気どろうとしない，素朴な妻の存在なのである．James Liang は農民出身の Yumei によって，満足感を知り，真理をつかみ，自身の存在理由に納得する．

Kinfolk は，筋立てが極めて明確になっているけれども，Pearl Buck の後半の作品に見られる長所，短所が混交されていて面白い面もあるが批判されるべき

点もある．主な主題がよく生かされており，説得力もある．Anmingでの生活の描写が非常に鮮明であり，教訓的で意味深いものがある．この村の特徴も全く大胆に描かれている．それに比べ，アメリカにおけるその他の場面は説得力に欠けている，もっとも中華街の印象には斬新さがあるが．残念なことは，素材の中に，あまりに多くの通俗的な描写が施され過ぎている点である．Louise Liangが結婚する相手のアメリカ人は，余りに立派すぎて信頼できないほどに描かれている．Dr. Liang自身は，「現代的」な中国美人に魅了されているので，この二人の関係が中国の各場面と歩調を合わせながら，ハリウッド的なモチーフを構成している．James Liangの妻Yumeiも，未熟なスーパーウーマン——常に親切で，辛棒強く，自己犠牲的な女性——として誇張して描写され，願望充足的な構想があまりに理想的になり過ぎ，真実味が乏しくなってきている．好感がもて，喜劇的性格面もあるDr. Liang夫人も，肉感的女性として意識的に描写され過ぎている．

要するに，Kinfolkという作品は，文学作品抜粋集のようなもので，二つの異った小説に含まれる構成要素，つまり，「純文学的」なものと，「通俗文学的」なものを混ぜ合わせて，その効果を狙おうとする独得な作品例である．

IV Command the Morning

Pearl Buckは，原子科学に関する諸問題に深い関心を持ち，現代物理学の開発，発見などに，より多くの知識を得ようと，テネシー州のOak Ridgeやニュー・メキシコ州のLos Alamos，そのほか，アメリカ各地にある，同様な原子力センターを訪れている．原子爆弾や原子科学から生ずるさまざまな問題に関しては，科学者に直接インタヴューし，その意見を聴くことに特別な興味を持っていたからである．彼女は原子科学関係の問題について，論文，短編小説，ドラマなどを書いているが，この分野で最も感銘を与える創作は，何と言ってもCommand the Morningという小説である．(19)

Command the Morningはマンハッタン計画の物語である．原子爆弾の創造，完成，使用までの5ヵ年間の経過を扱っている．小説の舞台は，シカゴ大学か

らOak Ridgeへ，それからLos Alamosへと移動し，遂には，The New Desertでの核爆発の実験が成功する。この時点で，日本に対し核兵器を使用すべきか否やの問題が起きる。ドイツで戦闘を続けている最中，核計画に携わるアメリカの科学者たちは，ドイツの科学者に先を越されぬ前に原子爆弾を完成させなければならないという合意ができていた。そのころはまだ戦争の行方は暗澹としていた。ドイツは結局，降服してしまったが，日本の運命も間近しという噂が流れはじめていた。科学者の中には，強力な海軍力による封鎖，通常兵器による波状爆撃を敢行すれば，日本も降服せざるを得なくなる，と考えていたものがいた。しかし，アメリカ陸軍やアメリカ政府の大部分の高官たち，それに，原子科学者の多くは，もし原爆を使えば，戦争は直ちに終結し，多数のアメリカ将兵の生命が救われることになると考えていた。

この小説の全般を通じて，さまざまな自己反省が行われる。科学者Stephen Coastは，この核計画に絶えず不安を感じている。原子爆弾を使用する必要性を残念に思い，それに代る解決策を見つけようとあらゆる努力をするが，結局は大多数の意見に巻き込まれてしまう。彼が愛する女性科学者Jane Earlは，もし原爆を使用すれば，それ自体不道徳なことだと考え，原爆反対の抗議をする。しかし大多数の意向は，早く原爆を日本に投下し，科学者たちに研究機関か産業界に復帰して貰いたいというのである。

Command the Morningという作品は，率直に言って，意図がプロパカンダにある。Pearl Buckは——少なくともこの時点では——Jane Earlと同じ考えを持っていたようである。つまり，1945年の状況下で原爆を投下し，多数の非戦闘員を殺戮するというのは，不道徳極まる行為であるというのである。原爆使用に反対する議論はしだいに高まっていく。ナチのためにヨーロッパから放逐されたハンガリーの科学者Szignyは，原爆を作る決定権を担う最も重要な中心人物であった。が，日本に対して原爆を使用することに強く反対する。彼は，日本軍にはそれに匹敵する武器がないので，核兵器を使うという懸念はない，と主張する。彼の話によれば，2日おきにB29がトリニトロトルエン(TNT：強力爆薬)や通常の爆弾を使うだけで，十分1個分の原子爆弾に相当する威力があるという。

原爆使用反対を熱心に説くもう一つの議論は，世界の世論である．ある原子科学者の主張は，白人に向けて原爆をテストする必要がないように，アメリカはドイツが降服するまで慎重にその時期を待っているのだと，アジア人は思うに違いないということだ．Jane Earl——アメリカ人だがインドで養育された——は，原爆を使用すれば，インド人のアメリカに対する信頼，愛情に重大な悪影響を及ぼすことになろう，と警告し，「もし，アメリカが原爆を投下すれば，己れを破壊し，世界中のいたる所を破壊することになる．世の人々はもうアメリカ人を信じなくなるだろう[20]」と主張する．その後，彼女は原爆使用防止に最善の努力をするようにと説いた，一通の手紙をインドの昔の教師から受け取る．それには，世界の人々はアメリカが原爆を使用することを許さないだろう，と書いてある．

この小説はまた，男性は世の女性たちの感情や意見を無視していると強く主張している．Jane Earl の考えは拒否される．核計画の民間側指導者の夫人で，いつも気楽で家庭的な Mollie Hall は，夫がこんな非人道的な武器と取り組み，その結果が，広島や長崎をあのように破壊してしまったのだということを知ると，ヒステリックになり，こんな物騒な世の中で子供を生んだことを後悔する．Stephen Coast の妻は，この世界情勢下で子供をもうける気はないし，Burton Hall のティーンエイジャーの息子，Tim に代表される子供たちでさえ，「ぼくらの世代の絶滅を企てる老人たちの一味[21]」と言って，科学者たちの偉業に反抗する．

作品のテーマ，取り扱う諸問題という点では，Command the Morning は思索をかき立てる，本格的な小説である．危機にひんしている基本的な問題については，最終的な回答を人間の良心に訴えている．核反応管理問題や原爆製造の歴史を扱う，有益な小説として，Command the Morning は，情報量の多い，詳細に科学的調査が行き届いている作品である．その点では，Sinclair Lewis (1885-1951) の Arrowsmith[22] という作品と同様，証拠書類によって立派に立証されている．例えば，Enrico Fermi のような実在の科学者たちが，創作上の人物と組み合わされたりしている．時折，基本的な科学情報を模造し，読者の理解を深めようともしている．例えば，Burton Hall は，原子力がどのように作用し，

他の問題にどう関係していくのかを，把握できない妻に説明しようと試みている。また，Jane Earl にはわかっているはずの情報を読者に理解させるために，繰り返し強調しようとしている点などである。

この科学者の孤独感は効果的に伝えられており，科学者としての夫と，科学者でない妻との間に生ずる不協和音が，もっともらしく描かれている。Pearl Buck は科学のすばらしさ，その無限の研究に絶大な敬意の念を示している。この作品の終末の部分で，原子爆弾は，ある意味で，時代遅れなもので，若い科学者たちは，すでにミサイルやロケットに転向しつつあると述べている。この小説の題名はこうした場面から付けたもので，旧約聖書の中で，神はヨブを卑しめ，「汝はかつて朝に命じ (Commanded the morning)，黎明をその部署につかせ，地の縁をつかんで，悪人を振り落せたことがあるか」と尋ねた，という一節から引用している。結局，次々に起る新しい科学的発見によって，人間が宇宙を制するとき，はじめて人類はこの問題に肯定的な回答を与えることができるというのである。

しかし，この Command the Morning は，評価すべき点は多々あるが，文学的には成功していない。教訓主義を強調しすぎ，プロパガンダが強いため，芸術的均衡性に欠けている。Stephen Coast と Jane Earl との愛情は，ロマンチックな好奇心だけで，明らかに Hollywood 産業を計算に入れての巧みな工作である。とりわけ，この作品の主たる弱点は，性格描写にある。つまり，この作品の登場人物はさまざまな反応や視点を例証するだけに過ぎない。詳細な科学的記述という点では，Arrowsmith と匹敵するものであるかも知れないが，Arrowsmith に登場する Max Gottlieb, Leora Tozer, Dr. Pickerbaugh のような印象的な人物が現われていない。Command the Morning に出てくる人物に対する V. S. Pritchett の論評は，正に当を得たものである。「Pearl Buck の描く人物の情緒的スケールが小さいこと，つまり，Hemingway の初期の作品に見られる人物のように，ただ『悪い』とか，『良い』とかを感じるだけのものだ。それでは，時折，問題が生じる」と指摘している。[23]

原爆を使用するという倫理観との関連で Command the Morning に密接な関係のある作品に，Pearl Buck の戯曲 A Desert Incident というのがある。[24] これは

アリゾナ州の砂漠にある実験場で，政府の秘密計画に取り組む科学者たちを描くドラマである．この計画グループの一人，イギリスの科学者は，自分が超破壊的兵器の製造に協力していることを知ると，この計画から手を引きたいと考える．このドラマの最後の部分で，新兵器が人類に極めて危険なものと万人に認められるようになると，関係する科学者たちは皆，原子力の平和利用への仕事に参加する決心をする．

Pearl Buck は，このドラマの中で，アメリカとイギリスの科学者がそれぞれ自国の政府に対し，未来の戦争で使用されるような兵器に関するいかなる情報も提供すべきではない，と強く訴えている．たとえ，共産主義国の科学者たちがこれに同意しなくても，彼女はこの信念を曲げることはない．このような一方的な立場は極端で，論争の余地も多いもの（もっとも Pearl Buck は一方的軍縮をそれほどやっかいな問題とは考えていない）だが，この考え方に対する，ある批評家の反応は興味深いものがある．Kenneth Tynan は，A Desert Incident を出来のよくないドラマだときめつけながら，水素爆弾一発で世界を壊滅させるかも知れないということに全く無関心な自分の友達のことに触れて，こう述べている——「Pearl Buck は最も重要なテーマを選び，それを漠然と情緒的に扱っているが，結局のところ，生きる面を強調している．一方，微笑ましいわが友は，超然とした歴史観から，死因という面に重点を置いている．彼女が選んだテーマと，その明確な態度から，私は Pearl Buck 女史を大目に見てあげたいと思う[25]」と．

A Desert Incident の枠組みを強化するため，Pearl Buck はめずらしく例外的な手法をとっている．つまり，シンボリズムの使用である．子孫繁栄のためには，結婚が必要だということを知らなかった古代の男女を象徴するため，二人のやんちゃな子供を登場させている[26]．インディアンの召使いとその妻にも，茶番めいたセックスを演じさせているが，Pearl Buck の説明によれば，それは，その生れる子が嫡出子であるのかどうか，夫が確信できなかった古い時代を象徴しているのだという．このドラマに出てくる不幸な夫妻は，二人の仲を引き裂かれ，そのため苦悩する男と女を象徴している．ドラマのヒロインである Elinor は，科学界に生きる現代女性を象徴している．その Elinor は他人との健

全な関係を保ち，人生の要求や責務を果していく。

Pearl Buck があえてシンボリズムに挑戦したのは失敗ではないかと思われる。理由の一つは，あらゆる面の生きざまを網羅しようとした点にある。Brook Atkinson がこのドラマの論評の中で指摘しているように，この作品は「視点が多く，負担がかかり過ぎているため，主要テーマが竜頭蛇尾に終っている」[27]。更に，シンボリズムの使用によって，大げさになったり，過度に単純になったりして，シンボリズムの意図と，現にシンボリズムが表現するものとの間に，矛盾が生じている。彼女のシンボリズムは，正に照すべきところを曇らせているので，適切さの点でも，微妙さの点でも失敗に終っている。

Pearl Buck のその他の戯曲同様，この A Desert Incident というドラマを読むと，彼女の作品の強みは何といっても小説だ，ということがわかる。劇文学は彼女に余り向いていなかったのではなかろうか。長編の戯曲を書き，数多くの人物を登場させるには，小説で示すような，広い概観的な視野が必要だったのである。

〔注〕

(1) This Proud Heart や Other Gods は，Pearl Buck が真剣に取り組んだ作品だが，アメリカを舞台に取り入れてある Now and Forever や China Gold は，どちらかと言えば，営利を目的とした作品である。

(2) Pearl Buck, American Triptych (New York : Day, 1958), p. viii.

(3) Ibid.

(4) The Townsman という作品が，Pearl Buck と関わりがあると見抜いた評論家が一人いる。Francis Hackett である。「A Sketch: Pearl Buck」New York Herald Tribune, Sept. 16, 1963, Book Week, p. 5.

(5) Pearl Buck, American Triptych, p. vii.

(6) Other Gods は，An American Legend という副題がつき，アメリカにおける生活の側面を取り扱っている。もっとも，作品の中の舞台は，中国，インド，チベットに及んでいる。この作品で Pearl Buck は，英雄崇拝の現象と成行きを追求している。

(7) Pearl Buck, American Triptych, p. 185.

(8) Ibid., p. 244.

(9) Ibid., p. 290.

(10) Ibid., p. 345.

(11) Ernest E. Leisy, The American Historical Novel (Norman : University of Oklahoma Press, 1950), p. 205.

(12) Pearl Buck, Pavilion of Women (New York : Day, 1956), p. 270.

(13) Pearl Buck, My Several Worlds, p. 256.

(14) Pearl Buck, A Bridge for Passing, pp. 76-77, 183-84, 254-56 および Mrs. Stoner and the Sea, and Other Works (New York : Ace, 1976), pp. 160-70.

(15) 佐藤重夫「Pearl S. Buck における苦悩の文学」中央学院大学総合科学研究所『紀要』第3巻第2号昭和61年3月 pp. 8-9. カナダの McGill University の教授. Pearl Buck の中国生活や中国人描写に対する痛烈な批判者.

(16) Pearl Buck, Kinfolk (New York : Day, 1949), p. 303.

(17) Ibid., p. 392.

(18) Ibid., p. 358.

(19) A Desert Incident のタイプ打ち原稿の序文参照. このドラマの原稿は New York Public Library の Theatre Collection に保存されている.

(20) Pearl Buck, Command the Morning (New York : Day, 1959), p. 276.

(21) Ibid., p. 142.

(22) Arrowsmith という作品は, 一人の若い細菌学者を主人公とし, 彼の修学の努力から学者として世に出る経験において, その科学的熱情と良心が金銭万能のアメリカ社会の中で, どのような困難を受けているかを描いている. 主人公の Martin Arrowsmith は, ついに自己の理想を貫いて実験室にこもることとなるのだが, しかも, 実際の対象としてその反面に取りあげられているのは, 学校や研究所や地方政界や社交婦人らの, 精密な解剖であり調査である.

(23) V. S. Pritchett の Command the Morning に関する論評——Scientific American, July 1959, pp. 159-60, 162, 164.

(24) A Desert Incident は, 前に The White Bird and Three Against Time と名付け, 1959年3月24日にニューヨーク市の John Golden Theatre で上演された. 論評は一様によくなく, 上演も僅か6回しか行われなかった. Pearl Buck のドラマは少なくとも他に4本, ブロードウェイで上演されている. The First Wife というドラマは1945年11月27日に Barbizon-Plaza Theatre で中国人劇団によって英語で上演された. 12回上演しているこのドラマは, 同じ題名の彼女の短編小説の素材から発想している. The First Wife に関する論評は Theatre Book of the Year 1945-46 (New York : Knopf. 1946)の p. 203 の George Jean Nathan の項に出ている. 1960年4月28日には, Charles K. Peck, Jr.との共作のブロー

ドウェイ・ミュージカル Christine が上演された．このミュージカルは Sammy Fain と Paul Francis Webster が歌い，素材は Hilda Wernher の小説 My Indian Family (New York : Day, 1945)に基づいている．Pearl Buck の未発表の 2 本のドラマ，The Empress と Flight Into China の原稿は New York Public Library の Theatre Collection に保存されている．The Empress は 1937 年頃書かれたものだが，一度も上演されていない．そのため，Imperial Woman (1956)という小説となって出版された．Flight Into China は，1939 年 9 月 11 日，ニュージャージー州の Milbburn にある Paper Mill Playhouse で上演されている．このドラマはのちに小説 Peony(1948)としてまとめられた．彼女はまた N. K. Narayan の小説 The Guide (New York : Viking, 1958)を脚色し，1965 年ニューヨーク市の Lincoln Art Theatre ではじめて上演された．一幕ものの Sun Yat-sen は出版されたが，上演された記録は何もない．

(25) Kenneth Tynan, Curtains (New York : Atheneum, 1961), p. 316.

(26) Pearl Buck 自身このドラマの原稿のまえがきで自分のシンボリズムの意義を説明している．

(27) Brooks Atkinson, A Desert Incident に関する論評, New York Times, March 25, 1959, p. 40.